

沖

俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

夏至光

能村 研三

文学ミュージアム

いよいよ市川に文学ミュージアムがオープンする。

これはかつて「水原秋櫻子と富安風生展」や「能村登四郎生誕百年展」などの企画展を開催した「文学プラザ」を大きくリニューアルしたもので、念願であった本格的な文学館が誕生することになる。

市川市は、永井荷風や幸田露伴、水木洋子、井上ひさしなど多くの文学者が居住したことがあり、詩歌の世界でも多くの俳人歌人にゆかりがあり、文学館がほしいという声が次第に高まってきた。

私も現役時代から文学館の建設には深くかわつてきたので、この日を迎えられるのは大変うれしいことである。

最初は、新たな建物を建設する案もあったが、いわゆるハコモノに対して巨額の投資を抑え実現する方法として、現存する施設を生かして、映像文化センターと文学プラザを合体し、それぞれが持つている良さを一体化させることで、市川に相応しい文学ミュージアムが出来上がるのではないかと考えた。

聖五月鳥語シャワーを浴びにけり

麦の穂にまぎるるまでを見送りぬ

走梅雨脈略積み本重ね

山青し笛一管の試し吹き

岬端に踏まれて強き車前草

ジオラマへ俳風吹かせ箱庭に

大爆布直視の眼力かな

空仰ぎ挽ぎたてトマト丸齧り

打水といふに如雨露はもどかしき

大宮・氷川神社

夏至光に朝一礼の宮大工

一部「俳壇」八月号と重複

千葉県内では、公立の文学館としては我孫子市にある白樺文学館に続いて二番目の施設となる。

文学館と言うと、堅苦しい書籍や原稿ばかりの展示が多いのだが、このミュージアムは映像や写真などを多く使っており、今まで文学にあまり親しみのなかった人にも、興味を持っていただけるのではないかと思う。

施設の構成は常設展示では、演劇、映画、小説、詩歌の4つのコンセプトを基に、市川市ゆかりの文学者を紹介する。

今回の開館記念特別展は「永井荷風展」である。荷風は私と同じ八幡に長く居住し、日記文学の最高峰と評される『断腸亭日乗』、ならびに遺品を関連づけながら紹介し、永井荷風の作家活動と暮らしを展望することで、市川に暮らした永井荷風を紹介する。

これに合わせて永井荷風が詠んだ俳句も、同人の町山さんに色紙に揮毫していただきロビーに展示している。

蒼茫集



涼しき傾斜

田所節子

土踏まず花のごと見せ海女潜る
傘立てにあるまつ白な捕虫網
能の出のやうに先師の現る昼寝
水を掃く傾斜涼しき魚市場
草いちご口にふくむも旅なれや
キャンプの子まづ薪割りを教はりぬ

御旅所

上谷昌憲

御旅所に鰻頭怖い奴が居る
土砂降りに首差し伸べて祭馬
神輿昇く漢のどこか溶けてをり
信号のいくたび変はる荒神輿
ナイターを包み隠せるドームかな
白鱈をさつと炙つてくれにけり

抽象に片寄る

北川英子

唇に指立て浮巢眼で示す
計り得ぬトラフの機嫌青葉潮
抽象に片寄るからす瓜の花
匂はねばどくだみ千の白い星
湖風涼しや欄間の透かし彫
仰ぎ見る朴の花ほか知らざりし

みんな眠つて

千田百里

生れ日や青き林檎を手で割つて
徽の書を積んで詩魂の出入口
父の日の音なき電子時計かな
みんな眠つて風鈴だけの昼下り
東大に若葉風立ち辰雄の忌
卒寿・米寿の姉が来るなりサンガラス

結び目 宮内とし子

眼の馴れてまだある昏さ種物屋
太陽に薔薇満開を競ひけり
緑さす勝馬ゆつくり歩みけり
刃物屋の刃の向き揃ふ薄暑光
牛小屋の牛の長啼き梅雨晴間
結び目に雨粒光る青茅の輪

草いきれ 溯上千津

列正し蟻のひく翅透きとほる
季語集に亡き名去りし名草いきれ
老いて遅遅香のみに聡し針槐
梅雨の鳩鳴くよ夕餉は味噌仕立て
会はぬ間に違和感きざしむたり梅雨
リハビリの鞭よ自愛よ立葵

大梅雨晴 遠藤真砂明

青梅雨の鶯張りを鳴かせけり
車椅子からあぢさゐの毬をつく

生きてゐる大梅雨晴を仰ぐかな
素潜りの両手に鮑かざし浮く
磯岩に立つ夕虹の消ゆるまで
志望校正門を入れる夏期講座

反発心 久染康子

万緑極まり神域の浮上せり
緑蔭の日の斑に紛れ魚と化す
ぶらんこの沸点で会ふ雲の峰
波一枚サーファー立つたりしやがんだり
岩清水啜るには邪魔鏝広帽
小突かれて浮人形に反発心

遠きところで 吉田政江

母の日や花束二つにある個性
よく泳へて組体操の汗の顔
麦秋の遠きところで金高値
夏未明地球の裏のホイッスル
父浦郡の日や卵一個は固茹でに
磯遊浦郡び弁財天の視野の中

金魚玉 菅谷たけし

水張田つぎつぎ空のつながりぬ
田打せり妻子裏切ることもなく
植糸終へて誰もぬぬ田や遠筑波
白詰草軍手をはははよく洗ひ
麦笛の胸にやさしく刺さりけり
金魚玉震源凶に×混みあへり

鬼百合 森岡正作

高層の都市炎帝に刃向かへり
人も馬もなき麦秋の深廂
鯉こくの味噌甘かりし早梅雨
鬼百合の世が世であれば下剋上
若返るための鏢広夏帽子
梅雨深む通過電車の唸りやう

すぐ一雨 林昭太郎

子の息が空にいつぱい石鱸玉
包帯の先をふたつに裂いて夏
夏立ちて足裏の聡き二三日
田を植うる送電塔に跨がれて

麦秋や新書をつつむパラフィン紙
四万六千日一雨の過ぎてすぐ一雨

夜を濃くして 甲州千草

試運転ですと梅雨入りの駅通過
十葉に風の忙しき室外機
無頼派のゆつくりと干す黒ビール
釣人の傍に居すぎて蚊を増やす
蒲公英の絮を閉ぢ込め発車ベル
花椎の夜を濃くして頁繰る

水無月 松井のぶ

つぎつぎの人波に牡丹老いられず
市川の空へ傾く朴の花
濃淡のみどりに木洩れ日の深し
食欲も歌もすこやか五月晴
いかづちの一喝に会ふ測候所
妹逝く青水無月の水含み

裏蓋 細川洋子

裏蓋のついてぬかど時計草
子燕の発条仕掛なる揃ひやう

萍のびつしり耳順遠からず
坂うへの作家旧居の花うつぎ
もんどりを打つ雨脚と萍と
甘藍の緊密に巻く気力かな

励まねば

渡辺輝子

水木邸の垣を道草花しどみ
辰雄忌や追分宿の芽落葉松
人恋へば梅雨満月の赫きこと
いちにちが悔なく暮れて胡瓜揉
梅雨雲の上は青空励まねば
逆縁の嘆きを悼む梅雨の星

働く水

藤森すみれ

眉を濃く引き山国の夏に入る
水を打つ瀕死の松になほも打つ
滝しづき浴び大いなる時を得し
滝落ちて働く水となりにけり
透明な傘に青嶺の雨ざんざ
端居してよりの松風夕の風

離郷

秋葉雅治

笛の音の瀬音にかはり祭終ふ

笑み美しき女系三代さくらんぼ
荒梅雨のダムは喜悅の水位かな
あんず熟る蛇行いくたび千曲川
甚平や離郷を語る膝がしら
父の日や母の羈絆を脱けて父

侏儒

広渡敬雄

昼寝人うまい空気を吸うてをり
紐解いて洗ふズックや立葵
侏儒ひとり蚩袋にゐるごとし
直球で来いと甚平構へけり
玉虫を見せ合うてゐる登校日
押し花に緑うつすら長崎忌

余白

頓所友枝

掌にひよこの眠る聖五月
目瞑れば山の呼気なり若葉風
松葉杖荷籠に揺れて梅雨晴間
雲の峰明日へと延びるすべり台
涼しかり余白の語る水墨画
向日葵や北の大地を埋めつくし

潮鳴集



一直線

内山照久

万緑や皮膚呼吸して血を一新
藤垂るる引力の線眼前に
アルバムに多くの故人竹の秋
肩書きは一級河川あめんぼう
布を裁つごとクロールの一直線

一度でも

佐野ときは

日輪を消しながら行く黒日傘
一度でも風に散りたき水中花
川音聴く鮎の触れ合ふ音かとも
梅雨晴間館パンの皮艶々と
草刈つて風低空にしてしまふ

隠し味

栗原公子

鳥語したし青葉の風のかよふ徑
薔薇にふる雨の雫もぼらの色
豆飯に郷愁といふ隠し味
まくはうり深井戸ありし祖母の家
なにもかもやがて日常新茶くむ

舟轆轤

佐々木よし子

形代に兄の名しるす楷書体
夕薄暑貝殻路地をさくさくと
更衣して久々のハイヒール
川沿ひに伸びし町並祭来る
とべら咲き錆び色深き舟轆轤

沖作品



能村研三 選

噴水をひとまはりして意を決す
健気にも咲きつぐ供花や五月閣
うつむいて螢袋は恋の花
つくばひの湿りをもらひ苔の花
夏つばめ筆勢強きみつをの詩
テレビのみはしやぐ暮春の待合室
夜の雲のこの静けさや夏はじめ
葉桜や会ふより別れ多くなり
女生徒の白きかひなや更衣
ワイシャツのある蕎麦屋夏きどす
鱈干さる青き涙の乾くまで
葛切やさらりと流す艶話
尺蠖の補陀落めざす歩みかな
桜桃忌水底にある捨て鏡
髪洗ふ思ひの丈を泡立てて

大分

廣瀬 倭子

東京

五十嵐章子

関根

瑤 華

焦げくさきまでに麦秋村晴るる
風五月拾ひ読みして歎異抄
滴りの次の膨みまついとま
クレマチスの暮色蒼然たる故郷
草刈機の音より夫を呼び戻す
鯉のぼり泳ぐはいつも自由形
わが町に直滑降のつばめ来る
子燕の順番を待つ大きい口
緑道の木洩れ日あまた愛鳥日
水郷の田毎の空やあやめ舟
眠りへと短夜区切るアンソロジ
玉砂利の黒うるはしく梅雨に入る
閨門に水の昂る薄暑かな
父の日や電動鋸の空うなり
かたつむり歩みし距離を殻に巻き

大分

堀 園子

千葉

神戸やすを

市川市

峰崎 成規

沖作品 15句選評

*
能村研

噴水をひとまはりして意を決す 廣瀬 倭子

おそらく公園の一角であろうか。歩いていたら突然目の前に噴水が現れる。それまで中々決断に踏み切れなかったこと、思い悩んでいたことが、水を見たときそれまでの時間がしっとりと湿ってくるような感じがした。夏空へ広げられた清涼感あふれる噴水は、空気や地面を冷やすことで周囲の気温を下げたり、騒音を軽減する実用的な役割のほか、水辺に憩うという心理的な安らぎを人々に与える。作者はきらきらと水の粒を散らす噴水から力と勇気をもたらした。

テレビのみはしやぐ暮春の待合室 五十嵐章子

待合室というところ、いろいろな待合室が想像できる。列車が日に何本しかない田舎の駅の待合室。空港ターミナルで搭乗を待つ間の待合室。病院で診察を待つ待合室。それぞれの場で、人

の心理状態が違うかも知れないが、人間のドラマがあるのが待合室だ。春が過ぎ去るのを惜しむ気持は、他の季節より比較にならないほど深いものがあり、暮春という言葉には詠嘆的な響きがある。それにしても、最近のテレビのお笑い中心の番組には辟易するものがある。

桜桃忌 水底にある捨て鏡 関根 瑤華

桜桃忌は太宰治の忌日で、太宰は愛人・山崎富栄とともに三鷹の玉川上水に入水自殺した。遺体が上がったのは六日後の六月十九日。奇しくもこの日は、太宰の誕生日でもあったことから、太宰を偲ぶ日となった。水底にある捨て鏡が、ニヒルな容貌で深謀遠慮的な文体の小説を書く太宰治を象徴しているように思える。中村苑子に「貌が棲む芒の中の捨て鏡」という句がある。

焦げくさきまでに麦秋村晴るる 堀 園子

旅に出かけた時、列車の車窓に果てしない麦畑が展開するところがある。何度見ても、惚れ惚れするくらいに美しい風景である。ただ遠くから麦畑を見ただけでは、この「焦げくさき」という表現は出てこない。最近の農作業は機械化が進んでおり、もはやこうした麦刈りの実感もなくなってしまうが、この句は村中が麦秋のただ中であって、麦刈りの現場を知り尽くした人の句である。

(以下略)